

## 川越地域文化資源の再生について

北欧アーティスト、アグネータ・フロックとの  
コラボレーションの実践から

**On the Revitalization of Kawagoe Regional Cultural Resources :  
From Artistic Collaboration with Nordic Artist Agneta Flock**

2015年3月

小林 範子

**川越地域文化資源の再生について**  
北欧アーティスト、アグネータ・フロックとの  
コラボレーションの実践から

On the Revitalization of Kawagoe Regional Cultural Resources :  
From Artistic Collaboration with Nordic Artist Agneta Flock

小林 範子  
KOBAYASHI Noriko

**[要約]**

スウェーデンのテキスタイルおよび切り絵作家アグネータ・フロックと筆者がかって行った芸術的コラボレーション、すなわち、一方は川越と日本文化に関わる言語芸術を視覚芸術化する営為であり、一方は音楽化する営為であったのだが、こうしたコラボレーションは川越の地域文化資源に新たな意義を与えるものであり、また、川越の観光という面においても新たな魅力を生み出す試みであった。

アグネータ・フロックは、川越の歴史的景観を舞台に創造的想像力を駆使し、川越の歴史や民話に基づいた37の切り絵作品を作ったわけだが、筆者は、彼女の作品をアニメーション化するとともに、和歌をめぐる音楽作品を作り出した。彼女の切り絵個展は川越の伝統ある大蔵で開催され、それが川越に新しい視点をもたらした。

本稿のねらいは、神話や民話、和歌などを地域文化資源として最大限に生かし、観光資産価値とするべく、この芸術的コラボレーションの意義を考察することにある。

キーワード

地域文化資源、芸術的コラボレーション、神話、民話、観光

**[Summary]**

The artistic collaboration of the author and Agneta Flock of Sweden, a textile, paper-cutting artist, was a trial that might have given a deeper significance to the cultural resources of Kawagoe and provided a new sightseeing attractiveness to Kawagoe, by incorporating language materials into visual arts and tempo-based arts.

Agneta Flock, making full use of imagination on the stage of the historic cityscape of Kawagoe, produced 37 paper-cut works about the history and folktales of Kawagoe and the author did the animation of her paper-cut works and offered musical works composed on 31-syllable Japanese poems.

Her one-person exhibition with a concert was held in a big historic storehouse of

Kawagoe and gave a fresh viewpoint.

The purpose of this paper is to consider the significance of this artistic collaboration, in order to explore methods of making the most use of myths, folktales, and poetry as local cultural resources.

#### Keyword

Regional Cultural Resources, Artistic Collaboration, Myth, Folktale, Waka Poetry, Sightseeing

#### はじめに

6年後の東京オリンピック開催に向けて、外国人や多くの観光客を迎えるための準備が、本キャンパスが位置する川越市でもようやく高まりつつある。さらに、川越市霞ヶ関カントリークラブがオリンピックのゴルフ会場となることを契機に外国人観光客の増加を見込むことができる。その時に外国人の眼に川越の魅力、地域の遺産がどのように映るのであろうか、私たち川越市の地域振興の一翼を担う者にとって、川越はいかなる観光遺産価値があるのかについて改めて認識しておく必要がある。

人間が伝承してきたもの、あるいは、想像されたものは、多く文字資料として残され、書物の形態がとられている。川越にも多く伝わる文字化された民話もそうしたもののひとつであり、言うまでもないが、重要な文化遺産としての価値を有している。しかし、現代の地域社会は大きく変貌し、伝承の場は閉ざされたものとなっている。かつては当たり前のこととして受容されていた民話も語り継がれなくなってきたというのが近年の現象である。

本稿の発端は、筆者がスウェーデンの織り物・切り絵作家アグネータ・フロックとの作品づくりとイベントを通じて、言語資料の視覚芸術化、時間芸術化により、川越の文化資源に新しい意味付けができるのではないかと、さらにはそれが新たな観光の魅力になるのではないかと考え、取組みを行なったことにある。

アグネータ・フロックは、川越の歴史的な街並や建造物を舞台に創造的想像力をはたらかせ、川越の歴史、民話、産物などを題材にした37の作品を創作している。筆者はその資料探し、取材や翻訳を通して、幸い、彼女とコラボレーションをする機会を得た。そしてそれがスウェーデン大使館での「アグネータ・フロックの世界一ゆめ×織×物語」展覧会として結実した。また、その際に筆者が和歌を題材に作曲した音楽作品を提供、アグネータの切り絵作品をもとにした動画も作りコンサートを開催することができた。さらに、川越の蔵でも展覧会やコンサートを開催し、大勢の市民に新鮮な視点を提供することとなった。

本稿では、これらの実践についての意義を考察することにより、歴史や産業、建造物とともに、神話や民話、和歌などを地域文化資源として活かす試みについて考察してみたい。

## 第1章 スtockホルムから川越へ：アートと音楽による3つのプロジェクト

筆者とアグネータ・フロックとの出会いは、2008年8月16日（土）～31日（日）に行なわれた市民団体の主催する、観光客と市民交流の場創出アートイベント「あるってアート2008」（国土交通省小江戸川越観光ルネッサンス補助事業）においてであった。川越の歴史的な街並や建造物を舞台に、その場にふさわしいサイトスペシフィックな芸術作品を作り出し、また市民がその作品を見て回るというものであった。市内各所でアートの公開制作が行なわれ、参加アーティストは20名（このうち海外アーティスト5～6名）が、宿泊施設として提供された古い民家に滞在しながら交流を深める機会となった。

筆者はそのイベントの半年以上前の2008年1月からボランティアスタッフとして渉外および通訳にあたり、海外アーティストとのやりとりを担当することになったが、そこにアグネータ・フロックとの出会いが待っていた。

この作業の準備として、川越、特に現在の川越は言うまでもなく、歴史、民話、織物、産物についての様々な質問に対し、資料を探索、翻訳するという過程をくりかえした。この結果、川越に関連する様々な切り絵作品をアグネータは37作り出し、川越市立美術館で展覧を行なった。

観光客の誘致という目的でのこのプロジェクト自体は一応成功裏に終わったが、つくられた作品について、どのようなストーリーを持っているのか、川越の歴史や文化などとの関連での説明も少なく、不十分な展覧で終わった。

そこでこのプロジェクトが終了したあと、あるNPO法人と共同で、アグネータの川越作品の展示を独自に企画することにした。また筆者の音楽と学生の映像でのアニメーションを制作することとした。また、逆に筆者がそれまで万葉集の和歌を題材に音楽作品を作曲していたので、これをもとにアグネータに切り絵の制作を提案、切り絵アニメーションと音楽とをコラボレーションさせたコンサートを開催することになった。



図1 川越の大蔵・茶陶苑でのアグネータの展覧会

こうした作品を発表する機会を求め、筆者は2010年の10月、東京のスウェーデン大使館に提案書を送り、企画は実現することになった。

当時のスウェーデン大使から、大使館外の展示会も是非複数開催し、日本とスウェーデンの友好促進をすすめるようアドバイスをいただいた。まず、2011年4月の開催に向けたイベントを実施した。2011年1月16日のことであるが「万葉集で結ぶ瑞典と日本」アグネータの切り絵アニメーション上映と音楽コンサート（表参道ヤマナシヘムスロイド）では、フルート、パーカッションに筆者のピアノと歌という編曲による演奏で、アグネータの生

い立ちや織りとの関わりなど映像とともにレクチャーコンサートを行なった。この時、スウェーデン大使館の参事官カイ・レイニウスご夫妻にも出席していただいた。

しかし、3月11日未曾有の東日本大震災が起きた。この大震災の惨状を前にして、アートそのものの定義も見失われる中、4月8日～23日スウェーデン大使館個展と大使館外イベント、つまり表参道ヤマナシヘムスロイドおよび代官山アクアビッドギャラリー展は、半年延期を余儀なくされることになった。もちろん、スウェーデン大使館のアダム広報担当官による、タペストリーの売上金を福島の子供への寄付にあてるという企画も後で実現することになるのだが。

しかし、その年の10月3日～21日、半年遅れでスウェーデン大使館でアグネータ・フロックの世界―「ゆめ×織×物語」展覧会を、さらに大使館外イベントとしてアクアビッドギャラリーで「北欧の食とビンテージカフェ」開催、ワークショップと切り絵コンサートが開催された。ボランティアで立ち上げたアグネータのスウェーデン大使館のオープニングパーティには約160人参加者が集まった。その際に、12曲の万葉集を題材に筆者が作曲した音楽およびアグネータの作品にも登場するスウェーデン語の民謡や歌曲「Kristallen den fina」、「ああ麗しきベルメランド」、「さかさまの歌」等をチェロ、ピアノ、フルート、パーカッションという編成で演奏し、音楽と切り絵をもとにしたデジタルムービーも上映した。

最後にはスウェーデンの伝統楽器、ニッケルハルパの演奏が行なわれ、参加者皆が輪になって踊るという伝統的なスウェーデンのダンスで締めくくられた。

これは、日本とスウェーデンの地域文化資源を活用した新しいアートの展示会のあり方をも模索したものとなった。来場者は10月3日～21日の期間に、トータルで1000人以上であった。

これがきっかけとなり、川越の大蔵・茶陶苑でもアグネータの展覧会を開催することとなった(図1参照)。大蔵を使った切り絵の展示は、蔵の雰囲気とよくマッチして新たな魅力を引き出した。開催初日10月23日はアグネータの切り絵(川越に関する37の切り絵と和歌を題材にした作品)と筆者の音楽と学生が編集制作した映像作品とともに、お話コンサート、スウェーデンの楽器によるコンサートも行なった。民族衣装をまとって登場した鎌倉和子夫妻のニッケルハルパの演奏は、川越の蔵とスウェーデンのフォークアートが重なりあって、大使館では演出できなかった歴史的な趣のある雰囲気を醸し出すことに成功した。

結果は、川越でも数日間の開催で426名もの来場者があった。海外の人の眼には川越や日本がどんなふうに見えるのか、川越の魅力を新鮮な視点で紹介する展示によって、来場者自らが気づかなかった魅力を発見でき、鑑賞者に大きな興味を与えた。また、川越の歴史や文化に対するあらたな発信ができたことから、神社や寺院などからも自らの寺社に由来のある作品に関心がよせられた。

すなわち、北欧アーティストによる視覚芸術化、音楽とのコラボレーションというこれらの実践は、文化を社会に向かって開く、すなわち、文化資源の社会的活用のひとつの在り方として意義あるものと考えられる。

ラフカディオ・ハーンが日本の松江に滞在して文学作品を生みだしたように、今後日本を訪れる海外のアーティストによって、今までとは違った魅力を持った日本文化の発信が海外に出来るようになるのではないかと、さらには、それによって今以上の外国人誘致を伴う新しい魅力も発掘することができるのではないかと期待される。

アグネータ展は、2015年の12月には、京都の伊勢丹で展覧会が行なわれることになっている。いにしえの古都とアグネータの出会いはさらに興味深いものである。

## 第2章 アグネータ・フロックとスウェーデンの農民芸術

アグネータ・フロックは、今日、スウェーデンのテキスタイルの世界で確固たる地位を占めたアーティストである。ストックホルムの国立美術館、北方民族博物館、イエテボリーのルスカ美術工芸博物館、ボロースのテキスタイル博物館等が彼女の作品を所蔵している。また、切り絵の世界では、スウェーデンの民話から、一角獣のような古代ギリシャ神話・ヨーロッパ中世の寓話、そして日本の和歌の世界までがモチーフとなって様々な作品を生み出している<sup>1)</sup>。

彼女は、1941年スウェーデン、イエテボリーに生まれ、スウェーデン国立美術工芸デザイン大学を卒業、言語学者である父がユネスコの職員であったために、エチオピアやタイで多感な年頃を暮らした。彼女において、生を受けたヨーロッパの文化と少女期を過ごしたアジア・アフリカの国々の経験や記憶とが重なり合い、アーティストとしての魅力的な創造的想像の世界がつけられている。

たとえば、エチオピアのマーケットを飾る多彩な色や道行く人の美しいパラソル、美しい色が満ち溢れるタイの文化、バンコクの寺院、音楽やダンス、マーケットで売られる布、野菜や果物の市場、アジア・アフリカの生活に根ざす多彩なフォークロアが溶け合って彼女のアートに流れ込んでいる。また、一角獣のような、ヨーロッパ伝統の古代ギリシャ神話や中世の寓話の夢見るような創造物たち、父オッシアンが語ってくれた創作物語や父の作った植物標本帳も彼女のアートに影響を与えている。

特にタイの文化は、彼女の切り絵の世界に色濃く影響を与えた。もともとアグネータは幼い時期から家で紙の人形を作って遊ぶことの好きな少女だったわけだが、タイの伝統芸能である影絵劇に使われる鮮やかな彩色の紙人形の形と影が今日のアグネータの切り絵のインスピレーションの源となっている。

15歳、タイから帰国したその年、切り絵を得意としたアンデルセンがモデルといわれる、物語を話しながら切り絵をする学生が登場するアンデルセンの最初の創作童話「イーダちゃんの花」を読み感動、下絵なしでフリーハンドでの切り絵をはじめている。

むろん彼女は、アンナカルパソンの刺繍やノルウェーのハンナリーゲンのテキスタイルから影響を受け、テキスタイル作家の道を歩んだ。大学を卒業した後は、テキスタイルデザイナーとしてのデビュー作「ベルベット・ジャングル」が素材の面白さや立体という独特な表現方法から注目されるのだが、むしろ、伝統的な絵織、タペストリーへと向かって行く。彼女はそれを「天から地に向かって」ではなく、「地から天に向かって織りあげていく」絵織とみて、深い世界を感じたと彼女は述べている。いわば物語、叙事詩の世界を絵織で表現、多くのタペストリーを織っていく。織りに使う毛を彼女自身が紡ぎ、染めるのだが、ここで素材と語り合い、素材の持ち味を知り、作品に生かすことになる。

1988年、年老いた切り絵師が収集していた切り絵コレクションを見て感銘し、翌年には、初めての切り絵の展示会をストックホルムで開催した。これ以降、織りの作品の紹介と

もに多くの切り絵作品も紹介されるようになり、現在は、切り絵の仕事の比重が大きくなりつつある。彼女の切り絵の魅力は、風景やモノを写生してそれを切り絵にするのではなく、彼女の心の海にひろがる豊かなファンタジックな世界を表現しているところにある。

前述したように、スウェーデン大使館のアグネータ展が延期を余儀なくされた東日本大震災が、自然と人間との関係を再考させることにつながり、価値感の変化をもたらす大きな契機となったのだが、別の言い方をすれば、彼女の世界における自然と人間とは、支配・被支配の関係ではなく、お互い対称の世界にあるということである。アグネータの作品において、人は庭の植物たちともまことに親密に接していて、われわれ鑑賞者は、人も動物も自在なメタモルフォーシスのなかに時にユーモラスな世界までも見出し、至福の充足感を得ている。



図2 さつまいもとキュウリ

その典型として、アグネータは、川越特産のさつまいもとスウェーデンのベステロース特産のキュウリが擬人化され、なかよく手を取り合って一緒に踊る切り絵をつくった（図2参照）。ベステロースは、北欧でももっとも古い都市のひとつでメーラレン湖岸の美しい街であるが、18世紀、19世紀には特にキュウリの栽培が盛んであった。アグネータは川越がさつまいもで有名であることを知ってこうしたユーモラスな作品を生み出したのである。

スウェーデンは、長く厳しい冬と素晴らしい夏を含め、自然から学ぶという姿勢が明確な国である。アグネータの家の庭では近所の人や親しい人が集まって、庭のナシやりんごなどをジャムにしたり、ケーキにしたりしてフィーカ（お茶）を楽しむ。休みの日には、近くの森に行き、ブルーベリーを摘んだり、森でランチを楽しんだり、また夏には、森と湖の素晴らしい自然を楽しんでいる。また、寒くなってくると、小さなビニールハウスの中で、グリーンを見ながらティータイムを楽しむ。

アグネータのルーツとなる世界は、南スウェーデンのスケーネ地方の文化やテキスタイルなどのフォークアートである。彼女の祖母は織り手の名手で、牛や馬を飼う大きな農家には6人のメイドがいて機織りを手伝っていた。哲学者である母もアグネータに伝統的なフォークアートや手工芸に注意を向けさせている。

100～200年前のスウェーデンは、農業と手工芸で成り立っていた。手工芸に関しては17世紀ごろに遡る歴史があり、各地で独特な手工芸が発達していた。しかしながら、次第に近代化の波にのまれ引き継ぐことが難しく廃れつつある状況に接して、ヘムスロイド、つまりスウェーデンの手工芸協会が今から約100年前に設立された。それは豊かな農民文化の数々を守る運動である。ヘムスロイドは現在では全国27の協会、セレクトショップ、出

版部門を運営しているが、作品は編み物、刺繍、木工、陶器、鉄製品など多岐に渡る。各地で広がったデザインやパターンも多く、各地方の名前のついたものが多い。多くのデザイナーがそれらの伝統を学び、インスピレーションを受け、そのうえに創造を繰り返していることが、北欧のアートをクリエイティブにしている秘密のひとつでもある。

このヘムスロイド運動をすすめたリリー・シックマンは、アグネータの祖母の家にも調査にいき、収蔵もしている。当時の裕福な農家では、本業の合間に、様々な織物を作っており、それが富の象徴でもあった。それらは国立美術館に所蔵され、同時に伝統のフォークアートを学ぶ学校に残され、現代の作家の創造の源ともなっているのである。このスウェーデンの伝統継承の理念と方法には、川越地域の振興にあたり、学ぶべきことが非常に多いと思われる。

### 第3章 川越の歴史と文化資源についてアグネータ・フロックが見る視点

江戸時代の『武蔵三好野名勝図解』によると、河越（川越）の産物として素麺、マクハ瓜、モヤシ、ウド、なすび、河越小麦、金時ささぎ、嵩山コンニャク、絹平、生絹、白管織、真綿、白布、小倉縞、花ごぎ、醤油、紫柴胡、桔梗、干枝柿、レンコン、初茸、アユ、鯉、鮎、ウナギ、ドジョウが挙げられている。さらに竹・木・薪・炭・板なども秩父との交易により、河越、扇河岸、新河岸を経て江戸へ運ばれていたという<sup>2)</sup>。

川越のある武蔵野の歴史を簡単に要約すると、関東ローム層の武蔵野大地は、万葉集の時代は茅（かや）の草原であった。しかし、江戸時代にはいると、江戸の人口40万人のために、食料の問題が起こった。幕府は、戦の功労者に土地を与えて開拓させた。茅の草原は、林と畑に代わった。松平信綱時代には、不老川沿い、野火止を開拓し用水をひくものの、厳しい開拓に土地を放棄する人が後をたたなかったという事実もある。次に、柳沢吉保の時代、三富新田の開拓では、平等に5ヘクタールの土地が与えられ、うち2.5ヘクタールが畑、2.5ヘクタールは屋敷と雑木林というかたちで、米50～60俵が収穫され、自作農として自立出来るよう配慮された。また、平等とはいっても、耕作放棄がないよう、開拓者の条件には厳しく注意が払われた。

初期の作物は、粟・稗・陸稻（おかぼ）で、米はとれないが、次第に大麦は挽き割りに、小麦はうどん、まんじゅうといった食料・特産物になった。その麦の間に植えたのがサツマイモで、飢饉に強く、主食にもなるため植えられたのだが、川越のサツマイモは甘味の多いのが特徴で、江戸で人気を博すことになった。さらには畑の土が風に飛ばないようにするため、周囲に茶畑が作られた。また、雑木林から堆肥が出来、落ち葉を堆肥にして畑に鋤き込むと、土がふかふかで柔らかくなった。また雑木林は建築材も生み出した。また、三富に雑木林の森ができることで、地下水脈層が江戸まで広がった。まさに、今日の持続発展可能な社会の発展にふさわしい、自然と共生する循環型農業モデルなのである。





図3 小林一茶の俳句に寄せて

アグネータは「大根ひき（だいこひき）大根で道を教えけり」という小林一茶の俳句をもじり、大根を茎や葉のついたサツマイモに替えて、川越への道を教える猫のお百姓の切り絵（図3参照）を作ったが、豊かな自然のなかで三富の特産であったサツマイモを手にする、いかにも堂々とした猫の姿は、持続発展可能な社会の意義を現代人に教えているかのようである。

尚美学園大学と川越総合高校が高大連携する「里山讃歌芸術祭」は、里山の自然を保護し、持続発展可能な社会のモデルとして三富新田に光をあて、そこに音楽を加える祭りでもあるが、実は三富新田のある三芳野町には伝統的な祭りや音楽がある。北永井囃子保存会は、この地区の古谷重松の伝統を受け継ぐ囃子である。実は、縁あって川越まつりにおいて、筆者の住む川越市内の町で、北永井囃子保存会の囃子が奏されることになっている。アグネータ夫妻もこの川越まつりに一度参加しているが、北永井地区は、このままでは後継者がいなくなるという危惧から、今年から小学生を中心に町内のこどもたちがお囃子を受け継ぐとりくみをはじめた。同時に、老人たちもこどもたちに囃子や祭りを通して教えたり接したりすることで喜びを得ているようである。武蔵野里山の環境保全や持続可能な発展への取り組みと祭りや音楽は、教育、文化創造、観光という社会活動に密接に関連していると同時に、歴史的伝統遺産の再生にもつながる実践なのである。

川越まつりの神幸祭を行なう氷川神社の山田宮司は、アグネータ・フロックの作品を見て神社の作品制作を依頼したひとりである。氷川神社の主祭神は、須佐之男命であるが、また暴風雨神として、水や雷の信仰に裏付けられた農耕守護神としての性格も持っている。須佐之男命が、八岐大蛇を退治し、迎えた妻が奇稻田姫命であるが、氷川神社はその両親である脚摩乳命と手摩乳命、そしてその子である大己貴命すなわち大国主命の五柱を祀っている。二組の夫婦神が祀られていることから、出雲大社系の縁結びの神として、若いカップルにも人気があるが、もとは農耕に深く関係した神社である。

もともと神道は農耕と非常に関わりが深い宗教である。狩猟時代の不安定な生活から、安定した生産性の高い農耕社会へと移行するに従って、日本人の宗教観は大きく変わり、作物に豊穡をもたらしてくれる太陽神や農耕神が、守護神として祀られるようになったのである。日本人にとって、宝は「田から」もたらされたものであり、五穀豊穡を神に祈るのが祭りである。

この氷川神社の宮司が目にしたのがアグネータの作品（図4）で、因幡の白ウサギを思わせるウサギが神社の紙垂（しで）のついたサツマイモの中で尺八を吹いている。うさぎ

はギリシャの神パンで、尺八はシュリンクスの笛のようでもある。背景はさつまいもの葉をモチーフとしている。こうした非常に斬新な川越の表現、すなわち今までになかったような外国人の視点からの地域文化遺産の意義づけは、観光や地域振興に非常に有効であるといえる。外国人の眼からみた地域文化遺産の意義づけは、言うまでもなく国際的な相互理解にもつながって行くと考えられる。



図4 川越のサツマイモの中で

日本文化においては、紙をつかった髪飾りをふくめ、木や紙など壊れる事を前提につくられている。作りかえられ、死と再生を経ることで、永遠の命を持つという考えである。伊勢神宮が、20年ごとに神殿が作り替えられ、再生するように、永遠の命は壊れるものを結ぶことと考えられている。結びは魂で生み出したもの、つまり、縁結びの「結す＝ムス」という語は、「生す（ムス）・産す（ムス）」で、物が生じてくるという意味である。「霊（ヒ）」は、御霊（みたま）、魂である。結びというのは、生命を生み出す新たな魂のことである。女の子が生まれてきたら「娘＝ムス女」で、男の子が生まれてきたら「息子＝ムス子」というように、新しい生命が生まれるところ、生み出す靈魂が結びであるというのは民俗学者の折口信夫説である。



図5 氷川神社奉納作品より

織物にも、永遠の命をつむぐという考え方がある。北欧の織物の歴史は古いが、スウェーデンとともに織物の歴史の古いノルウェーには BILLEDVEV（ビレッドヴェヴ：織絵）がある。そのルーツは9～11世紀のヴァイキング時代に遡る、厳しい寒さに耐える農民文化から生まれた織物である。ノルウェーでは、17世紀、18世紀は農民文化が大きく花ひらき、森やフィヨルドの自然や神話を題材にした織物が生まれた。それは北欧独特の美しい色合

いの糸を“絵の具”のように織りながら絵画のように描いていくという織物であった。海や戦場へと出かけていった夫や恋人の帰りを待つ女性たちによって織られ、受け継がれてきたといわれている。何百年にわたって型崩れがないことから、富裕層の間では、豪華な織物が作られ、装飾に使われ、また資産として受け継がれていたのである。そういった意味で実用品で経済的な富の象徴でもある。

その織物とともに物語も、女性の間で長く語り引き継がれることになる。女性が子孫を生むことで永遠性を保つように、織物は縦糸と横糸を紡いで連鎖してゆくことで永遠性を表しているのである。テキストはラテン語の語源では、織物のテキスタイルと同じ語源を持っており、テキスタイルは糸で織ったもの、テキストは言葉で織ったもので、言葉によって編んで文章化することで永遠化するように、糸を織りあわせることで永遠化してゆくのである。

北欧の女性たちは、神話や寓話を永い命を持つ織物に織り込み、メッセージを伝えてきたのである。アグネータはスウェーデンの民話から、一角獣のような古代ギリシャ神話、ヨーロッパ中世の寓話、そして日本の和歌の世界までをモチーフに作品をつくり、ユニコーン（一角獣）や月の原初の女神エウリュノメーなど、伝説上の人物などを作品の中に登場させる。詩や神話、叙事詩等をモチーフにしたり、さまざまな物語を紡いでいる。

実は、一角獣のような動物、植物、その他の形はシンボルとしてどういう意味を持つのかを、古代ギリシャ神話、ヨーロッパ中世、インドの寓話などから探り当てているのだ。シンボルに意味を持たせることで、作品には物語が、哲学が生まれ、見る人によって様々な解釈の深まる世界へと誘うことができる。



図6 雁に乗って：川越の正しい行き方

さて、伊勢物語にある三芳野の里を歌った歌から、1000年以上も前の川越が、三芳野という名で都にも知られた地域であったことがわかる。

三芳野の田面（たのむ）の雁はひたぶるに 君が方にぞよると鳴くなる  
わが方によると鳴くなる三芳野の田面の雁をいつかわすれむ

『伊勢物語傍註』（1776）では<sup>3)</sup>、昔、男がさまよい歩いて武蔵の国の女に求婚した。父は娘を他の人に嫁がせようと言ったが、母は藤原氏の出身だったので高貴な人に嫁がせようと志し、男に歌を贈った。三芳野の田面の雁が引板を鳴らす一方に寄って鳴くように、娘もあなたになびくでしょう、と。男は、私を頼みに思いを寄せてくれる娘を忘れはしな

い、と歌を返しているのである。この田面の里に毎年、北の方からとんできた初雁は、きまって3声鳴き、3度ぐるっと回って南の方へ飛び去ったそうで、このことから川越城は別名初雁城とも呼ばれることになったのであるが、そうした伝説から、ストックホルムから川越への旅は、飛行機ではなく、雁に乗ってというように表現しているのである。



図7 金の鯨鉾 (しゃちほこ)

川越に蔵づくりの重厚な建築物が建ち並ぶきっかけになった、明治26年、約1300戸が全焼した「川越大火」を知っての印象からか、「背中を向けているとき、屋根で何がおこっているかわかりはしない」というこのアグネータの作品にはユーモアがあふれている。鯨は、姿は魚で頭は虎、尾ひれは常に空を向き、背中には幾重もの鋭いとげを持っているという想像上の動物であるが、建物が火事の際には水を噴き出して火を消すということから、鬼瓦と同様に守り神とされている。はじめて屋根の上の魚を見た西洋の人ならではの、ユニークな作品である。



図8 山内禁令 (さんないきんれい)

図8は川越市の名刹、喜多院をめぐる民話である<sup>4)</sup>。星野山喜多院は江戸時代に徳川幕府の黒衣宰相といわれた天海僧正が住職を務めた寺であり、将軍家との関わりが深く、東照宮や三十六歌仙絵巻額などを含め、国の重要文化財を多く有する寺であるが、その喜多院のある坊さまが川越市の北に位置する伊佐沼に出かけた。すると、一匹の蛇が大勢の子供たちにいじめられているのを見た坊さまは「いきものをいじめてはかわいそうだ。その蛇を私にゆずっておくれ」と言い、子供たちにお金を与え、寺へと蛇を連れて帰り、山内に放してやった。ところが、やがて蛇は大きくなり、夜な夜な、付近の田畑を荒らすようになった。坊さまは「おまえをかわいそうだと思ってせっかく助けてやったのに、人様に迷惑をかけるとは何ごとだ。これから用事があるときは私が鈴を鳴らすから、池に入って

いなさい」と仙波の池に封じこめてしまった。それからというもの、喜多院の山内では鈴は鳴らさないようになったという、これも、今に通じる自然と人間の境界領域について考えさせられる民話から作られた切り絵である。



図9 仙芳仙人と小仙波貝塚

『川越仙波其外由来見聞記』、『星野山喜多院縁起』によると「往古仙波の辺は海沼なりしが、仙芳真人法力を以て漫々たる海水を去り、仏像を安置し、当院の草創とす」とある<sup>5)</sup>。

仙波下の沖積層地である低い水田の耕地は、往古は入り江の海であった。この坂下に貝塚があり湧き水がある。これは川越に海が入り込んでいた頃のことを伝える民話である。仙芳仙人という方がいずこからともなく川越、仙波の地へとやってきたのだが、満々と水をたたえた一面の海で渡ることもできず途方に暮れていた。すると、この海の主であるという龍神が老人の姿になって現れたので、仙芳仙人は己の着る袈裟を拵げた大きさでよいから土地をいただきたいと申し出たのである。龍神の許しを得て、袈裟を脱ぎ、波の上に置くと、何と袈裟は瞬く間に巨大な大きさになって広がってしまった。仙芳仙人は住むところがなくなってしまった龍神のために小さな池だけを残し、土仏をつくって海に投げ入れた。すると、たちまちにして海は退き、陸地（仙波の由来）になったという民話を素材として素朴に作られた切り絵である。



図10 民部稲荷（民部・梵心山）

民部稲荷は、『川越素麺』の冒頭二番目に出てくる不思議な物語である<sup>6)</sup>。東京、八王子の、とあるお寺に一人の小坊主がいた。この小坊主は毎夜どこかへと出かけて行くので、心配した和尚が小坊主に問いただした。すると、小坊主は「西のおやしきに住む民部さまのところでごちそうになりまいるのです」と答える。はて西には山ばかりのはず、とずいぶん不思議に思いながらも、和尚は、それではお礼でもしなければなるまいと民部さま

をお寺に招くことにした。そうして、次の晩、民部さまはお供を連れてお寺に来られ、一泊することになった。さて、宴も終わり、民部さまのお供と寺男が相撲をとることになったが、民部さまのお供の強いこと、まったく寺男は歯が立たなかった。

その翌朝、小坊主が庭そうじをしていると、何と赤や白の毛が庭に落ちているのを見つけた。それを知らされ驚いた和尚が民部さまにたずねると、「わたしはこのあたりの山に住まう狐です。昨晩は楽しく過ごさせていただきましたが、人間と仲良くなったことが知れてしまえば、もうこのあたりに住むことなどできません。これより川越の方へと去っていかねばなりません」と答え、民部さまは姿を消した。その民部さまが川越、旧梵心町（新富町）の民部稲荷であるが、そこから先は武蔵野であった時代で、梵心山の森に狐の伝説があってもおかしくはない。これは「葛の葉狐」など狐の恩返し譚にも類似する民話である。



図11 狭山茶 川越のお茶を貰えて

狭山茶のルーツになるお茶は、鎌倉時代のはじめに河越茶が知られていたことが高弁僧正によって示されている。禅宗で眠気をさますために、座禅にあたって喫茶することが盛んになり、他の衆派でも嗜まれた模様である。また室町時代に書かれた『庭訓往来』にも日本の茶の産地として武蔵河越茶が登場する<sup>7)</sup>。江戸時代には表千家、裏千家を代表するような京都の茶の様式とは違う、武家の茶道、遠州流も広がったのである。



図12 川越唐棧

アグネータが、明治43年に開設され、今も残る川越織物市場と川越唐棧についての本を読み<sup>8)</sup>、その印象を作品にしたものである。川越の織物は、川越唐棧織、略して川唐という名で江戸の町民の間で人気となったもので、紺、浅葱、茶、黄、赤など独特な色彩の縞と格子の風合いが美しい織物である。もともと入間郡は養蚕が盛んで江戸時代には川越で

も農家の副業として木綿の賃機織が手工芸として発展していた。埼玉織物として、木綿では、川越の双子縞、所沢の地縞、織緋、蕨の青縞、騎西紺、行田の白などが特産物とされ、絹織物では秩父や小川などが有名であったが、機業と仲買の太物問屋の豪商が川越に連なり、全国織物同業組合長も川越の山仁商店が務めていたほど、川越の織物市場は賑わっていた。幕末の嘉永年間には、正田屋久兵衛が唐棧縞を考案、これを宣伝するために市川団十郎（成田屋）に依頼、芝居の大井川で「わしが大切の一張羅の川唐の帯も水のため川止めに質に流すとは惜しい」との台詞を述べ、また川唐帯を締めるなど、人気を博したことで流行した。明治時代に山仁商店では毎日、荷馬車2台分を出荷したという<sup>9)</sup>。



図13 柿本人麻呂の和歌に

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む

歌聖柿本人麻呂は柿本人丸とも呼ばれ、三十六歌仙の一人に挙げられる歌人である。川越の氷川神社の境内にも人丸神社があるが、これは丹波国綾部から川越に移住してきた綾部一族が奉斎したものである。山鳥の長く垂れた尾のように長い夜を私は一人寂しく寝るのでしょいか、というこの有名な和歌をもとにアグネータが作った切り絵である。

「し」の音が繰り返され、[o]の音がさらに連ねられ、ゆったりと流れていく聴覚的イメージの美しさを持つこの見事な歌は、雌雄ともに色鮮やかな尾羽を持つ山鳥、つまり雉によって、長く美しい黒髪を艶にたゆたわせ、桂（うちき）を重ね、表着（うわぎ）、裳（も）を長々とひく女性が象徴された、視覚的イメージ、映像的美しさを合わせ持っているが、切り絵には実に巧みにそれが表現されている。藤原定家によって『百人一首』に選定され、新古今の美意識に通底した名歌とされた時から、山鳥の尾は、黒髪の比喩となった。

櫛を通し、先は切り揃えられ、入念に手入れをされた平安貴族の女性の黒髪の長さは、優に身の丈を越えて八尺ほどもあり、あたかも扇のごとくであったと言われている。いわゆる閨怨、すなわち、今宵訪れようとしなない恋人を待って嘆く女性の歌としてアグネータも捉えている。ひっそりと露に濡れて眠る山鳥、谷を隔て、雌雄別れて眠るという伝承をもつ山鳥の、その尾羽の華麗な彩りに艶麗な女性像が重ね合わされた夜の闇の輝きは、いかにも切り絵という小世界にふさわしいものである。

日本の文化はアグネータのような海外の芸術家にとって想像力を羽ばたかせる豊かな宝庫であって、日本の詩歌や川越の民話をモチーフにした今回の取組は地域文化資源によるまちづくりや観光にも役立たせることができるといえよう。

## おわりに

「都市と芸術」特別演習という尚美学園大学の授業で、学生たちと、川越での文化芸術による街づくりをテーマに、「川越を学び川越から発信する」プロジェクトづくりをすすめてきた。今後は、川越市の文化芸術振興課や観光課と話し合いを重ねながら川越を語る若い人材育成も必要になってくる。

川越の民間団体が、観光協会や商工会議所その他まちづくりに関わる有識者に対して、外国人おもてなし対応についての興味深いアンケートを行なったが、そのなかに、外国人観光客誘致およびおもてなしのためにはどのような施策、企画、仕組みが必要かという質問項目がある。

「眺めるだけの歴史的ハコモノだけではなく、ストーリーを通した体験やテーマごとのツアーがあるとリピート率もあがるのではないか」、「SNSやブログなどで拡散されるような話題やコンテンツ作りが重要だ」、「『川越ならでは』、『川越しかない』コト・モノを創出・発信していくことが必要である」、また、「外国人が喜ぶ体験型ツアーの提供、浴衣を着て街歩きをし、神社・寺へ参拝しお茶・お花などを体験するなど、外国人に日本語を知ってもらう機会の提供」、「世界の人が紐解きたくなるような、川越秘話からのイベントづくりが望まれる」等であった。

このようなアンケートの解答を見てみると、今回のアグネータ・フロックとの視覚芸術、時間芸術のコラボレーションによる民話などの地域文化資源の掘り起こし実践が大きな意味を持つことがわかる。むろん、彼女の日本文化に対する旺盛な知識欲と創造的想像力が今回の彼女の斬新な作品に結実し、鑑賞者に感動を与えたわけだが、そこに音楽や映像が付加される時、こうした実践は、今後、今までとは違った魅力を持つ地域文化資源再生の触媒となり、川越にとどまらず、さまざまな地域文化についてのユニークな発信の契機となり、そうした感動が、文化資源を最大限に利用した個性豊かな地域づくりにつながると期待される。

## <註>

- 1) アグネータの制作の歴史に関しては、主として『光のアトリエ北欧切り絵～アグネータ・フロックの世界』（NHK出版、2009）76頁～83頁参照。
- 2) 山野清二郎『校注 武蔵三好野名勝図解』（川越市立図書館、1994）168頁。
- 3) 同『校注 武蔵三好野名勝図解』15頁および38頁。
- 4) 『川越の伝説』（川越市教育委員会、1981）6頁。
- 5) 同『校注 武蔵三好野名勝図解』138頁。
- 6) 板倉善左衛門良矩『川越素麺』（寛延二年）2頁。
- 7) 『川越の歴史』（川越市、1981）88頁。
- 8) 龍神由美『川越今昔ものがたり』（幹書房、2003）16頁。
- 9) 岸伝平『川越閑話』（川越叢書、1954）52頁。

## <主要参考文献>

山野清二郎『校注 武蔵三好野名勝図解』川越市立図書館1994  
板倉善左衛門良矩『川越素麺』寛延二年



川越市総務部市史編纂室編『川越市史』川越市1972  
岡村一郎『川越歴史散歩』川越資料刊行会1959  
『川越の伝説』、『続川越の伝説』川越市教育委員会1981  
『川越叢書』1～10巻川越叢書刊行会1954  
『神道事典』国学院大学日本文化研究所弘文堂1995  
アグネータ・フロック『光のアトリエ北欧切り絵～アグネータ・フロックの  
世界』NHK出版2009  
矢吹恵子『北欧絵織物～ノルウェーの暮らしの中からのインスピレーション』  
マリア書房2008  
『文化資源学』第11巻文化資源学会2013